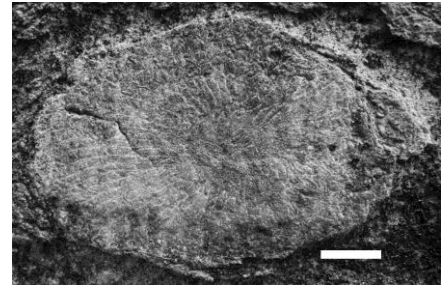


瑞浪市化石博物館研究報告第 46 号概要 – 掲載論文の紹介 –

オランダ，クリヴィウス博物館の壁に見られる 石炭紀前期（ミシシッピ紀）の大型四方サンゴ類

………博物館の中で古生代の四方サンゴ化石を発見

オランダの北ホラント州にあるクリヴィウス博物館の内装に使用されている石灰岩中から古生代に生息していた四方サンゴ類の化石が発見されました。建築材として使われている石灰岩は石炭紀前期（3 億 6 千万年前～3 億 2 千万年前）のもので

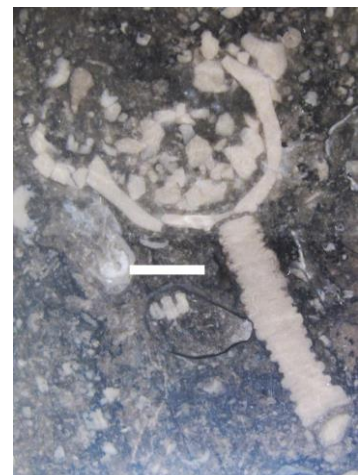


博物館の壁に見られるサンゴ化石
(スケールは 1.0 cm)

オランダ，アイントホーフエン駅で見られる石炭紀前期（ミシシッピ紀）のウミユリ化石

………駅の中で古生代のウミユリ化石を発見

オランダのアイントホーフエン駅の駅舎の柱に使われている石材の中からウミユリの化石が発見されました。この石材は、ベルギーの古生代石炭紀前期（3 億 6 千万年前～3 億 2 千万年前）の石灰岩で、駅舎を建築する際に持ち込まれたようです。駅を利用する観光客は、無意識のうちにこの化石を見ていよう



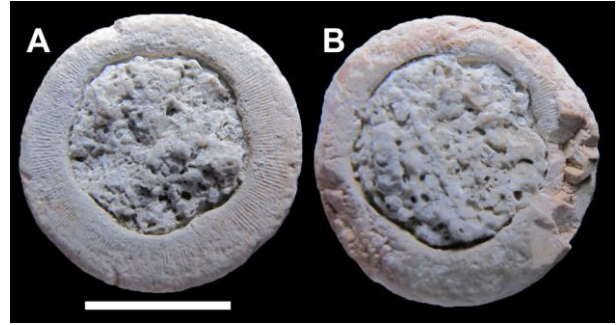
柱の中にあつたウミユリ化石
(スケールは 1.0 cm)

※上記 2 編の論文のように、石材に残る化石は私たちの身の回りに結構あります。アンモナイトやウミユリ、サンゴの化石などが意外なところにあるかもしれませんね（編集者 注記）。

オランダ北中部の人工島マルケルワデンで 発見された古生代のウミユリ化石

……………ビーチコーミングで古生代のウミユリ化石を発見

オランダ北中部のマルケル湖に浮かぶ人工島、マルケルワデンのビーチでウミユリの化石が漂着ビーチコーミングによって採集されました。その形態的特徴から古生代石炭紀前期（3億6千万年前～3億2千万年前）の化石と思われます。おそらく、他所の地層から洗い出された化石が氷河や河川的作用で湖まで運搬され、ビーチに漂着したものようです。

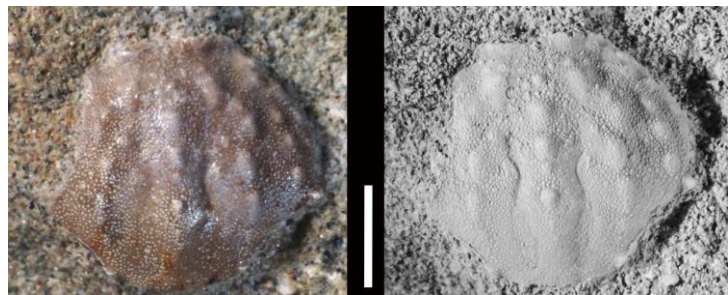


ビーチで発見されたウミユリ化石
(スケールは1.0 cm)

Paramursia circularis Karasawa, 1989（十脚目：短尾下目：カラッパ科）の同定と *Mursilata* 属について

……………瑞浪層群産 *Paramursia circularis* は *Mursiopsis circularis* になった

瑞浪市釜戸町上切の瑞浪層群（1600万年前）から発見され、1989年に新属新種 *Paramursia circularis* として記載された標本を再検討しました。その結果、イタリアの漸新世の地層から発見され、1889年に設立されたカラッパ科（カニ類）の絶滅属 *Mursiopsis* に所属することが明らかになりました。また、*Paramursia* 属は、台湾から知られる *Mursilata* 属とともに *Mursiopsis* 属の異名となりました。

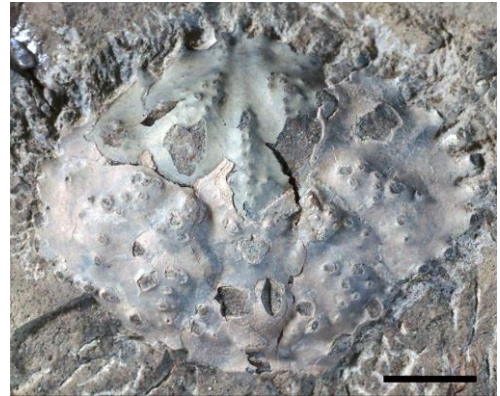


Paramursia circularis の完模式標本。右はホワイトニング処理をして撮影したもの（スケールは5.0 mm）

西日本産新生代後期のイチョウガニ科（十脚目）の再検討と 1 新属 1 新種の記載

……………新属「ミズホイチョウガニ属」誕生

西日本各地の 1800 万年前～30 万年前の地層からこれまでに記載されたイチョウガニ科のカニ化石標本を再検討したところ、別属であることや新属や新種が含まれていることが明らかになりました。*Cancer fujinaensis* は *Anatolikos fujinaensis* に、*Cancer tomowoi* は *Anatolikos tomowoi* に、*Cancer (Glebocarcinus) kaedei* は *Glebocarcinus kaedei* になりました。山口県長門市の 1800 万年前の地層から採集され、*Platepistoma kaedei* と記載された標本は *Glebocarcinus* 属の新種であることが明らかになり、*Glebocarcinus doii* として記載されました。また、*Cancer? imamurae* はこれまで知られている属と異なることから、新属 *Mizuhocancer*（ミズホイチョウガニ）が創設され、*Mizuhocancer imamurae* として再記載されました。



ミズホイチョウガニ
Mizuhocancer imamurae
(スケールは 5.0 mm)

静岡県の浜松層佐浜泥岩部層産更新世十脚類化石

……………静岡県の約 20 万年前のエビ・カニ化石

静岡県浜松市周辺に分布する浜松層^{さ は ま}佐浜泥岩部層から 10 種類のカニ化石が発見されました。カニダマシ科の *Raphidopus ciliatus*（ドロカニダマシ）やモクズガニ科の *Asthenognathus inaequipes*（ヨコナガモドキ）が多く含まれていました。これらのカニ類は、現在の内湾の泥底に生息しているものです。また、今回の研究によりドロカニダマシは少なくとも中期更新世には出現していたことが明らかになりました。



ドロカニダマシの甲羅
(スケールは 5.0 mm)

江戸時代の貝化石図譜『閑窓録』の研究

…………江戸時代の貝化石図譜を翻刻・分析

江戸時代に刊行された貝化石図譜として知られる耕雲堂灌圃の『閑窓録』を全文翻刻し、古生物学・国文学の観点から研究を行いました。研究の結果、作者の正体は、讃岐国白鳥松原村（現在の香川県東かがわ市）の俳人で大庄屋の竹内宗助（たけうちそうすけ? – 1816）であることが判明しました。本書で描かれている標本の産地は、北は蝦夷から南は日向にまたがり、主にペルム紀～第四紀の地層から産した 112 ロットの化石標本が描かれていることも明らかになりました。さらに、本書に収められている詩歌句の多くは竹と秋を題材としており、貝化石とはほとんど無関係であることも判明しました。すなわち本書は跋文で作者が記しているとおり、「竹石二愛の巻」となっています。『閑窓録』に描かれている標本は残念ながら現存していませんが、画・産地・寄贈者の情報が揃っていることから、貝化石は、日本の古生物学史・博物学史にとって、貴重な資料です。